

# 第1回報告書 | 稲垣貴俊

## 作り手たちが出会う、 時間をかけて準備する

Takatoshi Inagaki | St

Report



劇団た組『綿子もつれる』台湾公演 [2023年10月/雲門劇場] より (撮影: Kris Kang)

### 加藤拓也×許哲彬の出会い

「台北ではリアリズムの演劇がだんだん減っています。『私は台湾でリアリズム演劇を作る最後の一人になるかもしれない』と冗談まじりに言っているほどです」

四把椅子劇團 (4 CHAIRS THEATRE) を主宰する演出家・許哲彬は語る。2023年10月、加藤拓也が作・演出を務めた、劇団た組『綿子もつれる』台湾公演 [雲門劇場 (Cloud Gate Theater) / 新北市] を観劇し、その作風に感銘を受けたという。

許「加藤さんは作品を通して『リアリズムとは何か』を鋭く問うている。『綿子もつれる』はとても素晴らしい作品で、加藤さん自身にも大きな関心を持ちました」

加藤と許を引き合わせたのは、雲門劇場のシアター・マネージャー (当時) で、本作『どうも不安な様子』プロデューサーの新田幸生。許とは15年以上にわたる関係性だという新田は、『綿子もつれる』と、同年に許が演出した四把椅子劇團『呼吸 (Lungs)』 (作: ダンカン・マク

ミラン) を鑑賞し、両者に通じるものを感じて共同制作を打診。話を聞いた許は、「まさにベストタイミングだと思った」と回想する。

許「四把椅子劇團は2027年に設立20周年を迎えますが、主に私が演出を担当していて、これまで外部の演出家はほとんど招いていません。今後は多様な背景をもつアーティストと協働できる機会を作りたい、また『太陽』 (作: 前川知大) を2024年に上演したあとは、より国際的な目線や感覚を広げたいと考えていました」

かたや、加藤も自身初の台湾公演に手ごたえを感じていた。

加藤「『綿子もつれる』を台湾で上演して、観客の反応が想像以上に大きいことに驚きました。字幕での上演で、観客が前のめりにならざるをえない強制力はあったと思いますが、“わからないもの”を突き放さず、むしろ高い解像度で受け止めようとする姿勢を感じたのが嬉しかったです」

## テーマは「呪い」 ≒「思い込み」

かくして、国際共同制作のプロジェクトが正式に始動した。2024年5月には許が来日し、加藤・新田との協議によって、ワークショップや創作を段階的に設定しながら作品を共同開発することが決定。加藤が脚本・演出を、許が監修を務めることになった。

創作テーマである〈呪い〉は、加藤から提案されたアイデアだ。打ち合わせのなかで、許が加藤に「いま興味のあることは？」と尋ねたところ、いくつか挙がったキーワードのひとつが〈呪い〉だったという。許も「今回の共同制作にぴったり」と納得し、これがテーマとなった。

もっとも加藤は、「当初の出発点は〈呪い〉ではなく〈思い込み〉だった」と明かす。

加藤「“思い込み”や“不安”、“強迫観念”といった言葉から発想が広がり、〈呪い〉というキーワードが出てきました。『自分はこうなのだ』と思い込むことで、人間が身体や精神を縛られることは〈呪い〉だと言えるんじゃないか。その先で、過去にも描いてきた“倫理”というテーマにも触れられる気がしました」

## 台湾でのワークショップ

日本と台湾を股にかけたコミュニケーションは、主にメールで月に1～2回。さらに、本格始動から約1年後の2025年4月には、台北市で初のワークショップが開催された。

日程は5日間で、うち3日間は日本・台湾から約20名の俳優が参加した公開ワークショップ（日本側の参加者は本作の出演者とは異なる）。加藤の既存作品である『綿子はおつれる』と『One Small Step』の台本を、日本語・中国語（台湾華語）の2バージョン用意し、参加者はそれぞれの母語で流れを理解したあと、お互いの言語を交換しながら演じた。

本作『どうも不安な様子』では、日本の俳優は日本語、台湾の俳優は中国語で演じる。すなわち舞台上では2つの言語が飛び交うことになる想定だ。

加藤「（ワークショップでは）日本語と中国語が交わるところをどんな設定で見せるのかを考えつつ、複数の言語が混ざった会話がどんな質感とテンポになるのかを探って



2025年4月、台湾でのワークショップの様子（撮影：黄煌智）

いました。最も大切なのは、言葉の意味やニュアンスに頼らず演技を成立させること。台詞をどう喋るかではなく、あくまでもシチュエーションを軸にして演技を組み立てることです」

ワークショップに立ち会った許は、「加藤さんは『なぜ展開や台詞をこう書いたの

か』を俳優に必ず伝えることができる。繊細な作業を経て執筆されている証拠です」と話した。

許「台湾の俳優は日本人よりも早く正解を求め、効率を重視する傾向があると思います。けれども加藤さんは動じず、議論と実践を重ねながら俳優自身に答えを見つけさせていった。最後には俳優たちが、彼の目的と意図を完全に理解していました。相互理解の瞬間が生まれたことに感動しました」

その後の2日間は、作品開発のために本作の出演者（日本人3名・台湾人3名）が参加した非公開のワークショップ。加藤は〈呪い〉というテーマと、物語に関わる「小学校」のモチーフを用意して臨んだ。

加藤「参加者それぞれの“怖いもの”を持ち寄り、なぜ



『どうも不安な様子』作・演出の加藤拓也。2025年4月、台湾でのワークショップにて（撮影：黄煌智）

“怖い”とを感じるのかをディスカッションしたのがひとつ。もうひとつは日本と台湾の小学生の違いを知るため、お互いの小・中学生時代の生活やルーティンについての思い出を話し合いました」

このワークショップでは、加藤の作風や、求める演技の感覚を共有することも大きな狙いだったという。

加藤「僕の作品は一見日常的に見えますが、実際はいろいろな情報を削ぎ落とすことで成立させています。そこで、たとえば地図で道を確認するような日常の行為を再現し、その演技が本当にリアルに見えるのかを検証し、情報の削ぎ落とし方を考えていきました」

## 台本執筆、そして次のプロセスへ

ワークショップを経て、加藤は台本の執筆を開始。あらかじめ構想していたプロットに基づき、2025年8月までに書き上げられた初稿は60ページに及ぶもので、11月の稽古に向けて改稿を重ねる計画だという。常に複数のプロジェクトを抱える多忙の身だが、いつも台本を書き終えたあとは一度距離を置くようにしているそうだ。

加藤「書き上げた後にすぐ修正すると、執筆した感覚が残っていて客観視しづらいんです。ある程度忘れた頃に直す方が大胆に手を入れられる。自分の仕事を冷静に見つめ直すためにも離れる時間は必要だと思います」

改稿にあたり、今後の課題をひとつだけ教えてくれた。「ドラマとして美しくまとめるのか、それともエピソードを断片的なままで成立させるのか。扱う題材やモチーフをどのように膨らませていくべきかを考えています」

加藤の作風について、許は「緻密かつ抑制された凄みがある」と語る。「人間を細やかに観察し、社会の構造を分析し、手術のようにそれらの“断面”を切り出してゆく。最低限の材料を的確かつ冷静に操りながら、彼ならではの設定やユーモア、視覚的センスもある。ぜひ台湾の観客に観てもらいたいです」

## いよいよ台湾での稽古へ

11月には加藤と日本人のキャスト・スタッフが訪台し、いよいよ2週間の第1回稽古が実施される。許は「稽古で楽しみなのは、やはり『リアリズムとは何か』と



2025年4月、台湾でのワークショップの様子(撮影:黄煌智)

いうこと。異なる文化を持つ役者たちが、どう合理的に2つの言語で話すのか、観客がリアルだと感じられる瞬間がどう生まれるのか」と期待を明かした。

許「台湾と日本では、民族性や仕事の進め方に違いがあります。台湾の役者やスタッフは、全員がとてもエネルギーに稽古へ参加するので、よく議論するし、思ったことを遠慮なく言う。最初は驚かせてしまうかもしれませんが(笑)、加藤さんにはそんな台湾の現場を体験してほしいと思っています」

ちなみに新田は、加藤が『綿子はおもつれる』台湾公演の下見のために台湾を訪れた当時の印象的なエピソードを教えてくれた。

新田「プライベートの加藤さんはシャイで少食な印象でしたが、台湾の火鍋屋では驚くほどよく食べていた(笑)。国際共同制作は『メンバーの相性』『お互いの国や文化への敬意』そして『食事が合うこと』が大切です。食事が合わないと生活に慣れず、創作にも影響が出てしまう。加藤さんの様子を見て、台湾への長期滞在は大丈夫だと確信しました」

(2025年11月)